

2010年11月3日(水・祝)

3<sup>rd</sup> November 2010

## #5 槇 文彦 建築家

## #5 Fumihiko Maki Architect

スパイラルは、モダニズム建築を代表する建築家槇 文彦の設計により、1985年、その扉を開けた。モダンデザインの原点を象徴する正方形、円、正三角形、円錐など「純粋幾何学形体」を基本要素とし、外観には数多くの部分的形体を積み上げていくというコラージュ的手法を採用しているスパイラルの建築。

開館25周年を機に、国内外の大学やアートセンターなど数々の施設を手掛け、世界で活躍する槇文彦による実現したスペシャルトークでは「建築の社会性とは何か」をテーマにし、建築に興味関心のある若い学生を中心に約300名が参加した。

●

### 槇 文彦 建築家

1928年東京生まれ。東京大学工学部建築学科卒、ハーバード大学大学院修士修了、のちに両大学にて教える。1965年東京に槇槇総合計画事務所を設立。その代表として、国内、海外において幅広く設計活動を展開している。

代表的作品：ヒルサイド・テラス、スパイラル、幕張メッセ、風の丘斎場、テレビ朝日本社、MITメディアラボコンプレックス 等  
受賞：日本建築学会大賞、朝日賞、毎日芸術賞、ブリツカー賞、UIAゴールドメダル等

[www.maki-and-associates.co.jp](http://www.maki-and-associates.co.jp)

The Spiral building, designed by leading modernist architect Fumihiko Maki, opened its doors in 1985. The design is acclaimed for its use of basic modern elements and pure geometries based on squares, circles, equilateral triangles. The exterior collage of forms and surfaces represents its variety of interior spaces and programs. On the occasion of the building's 25<sup>th</sup> Anniversary, a special lecture was presented by Maki, who has designed many notable universities and culture centers around the world, on the subject of 'What is "On publicness in Architecture"?' to an audience of some 300, mostly young, architecture fans.

●

### Fumihiko Maki

Born in Tokyo, in 1928, Maki is one of Japan's most important architects. After graduating from the Department of Architecture, Faculty of Engineering, of the University of Tokyo, he spent several years studying in the US, completing his Master of Architecture degree at the Harvard University Graduate School of Design. In 1960 Maki made his architectural debut as an urban planner and founder-member of the Metabolist group. In 1965 he established Maki and Associates in Tokyo. Among his many honors are the Japan Institute of Architecture Award (twice, in 1963 and 1985); the American Institute of Architects' Reynolds Award (1987); the Pritzker Architecture Prize (1993); the Union Internationale des Architectes (UIA) Gold Medal Prize (1993). The Japan Art Association Praemium Imperiale (1999), and the Grand Prize of Japan Institute of Architecture (2001).

Notable works include: Hillside Terrace Complex, Spiral, Kaze-no-Oka Crematorium, University of Pennsylvania Annenberg Public Policy Center (APPC), the Maki building on the Novartis Campus, and MIT Media Lab extension.

[www.maki-and-associates.co.jp](http://www.maki-and-associates.co.jp)

## スペシャルトーク 横文彦 「建築の社会性とは何か」

今日は、建築の社会性というのはどのようなところにあり、また自分がそれをどのように実現しようとしたかをお話したいと思います。

### スパイラルの建築 ——コラージュ、回遊性、そしてメタファー

まずスパイラルについてですが、建築というのは必ず或る出会いによって、そこに何が建つのか、どのような建築ができるのか決まるわけです。1980年のはじめに、ワコールの故塚本幸一社長に呼ばれ、何か新しい建物を作ってほしいと頼まれました。土地は青山にあって、そこから文化的なもの、メッセージを発信できるようなものにしたい、そこではワコールの商品を売るつもりはないと、そういうお話でした。

我々が案内されたこの土地は、少し奥行きがあり両側に建物が迫っているもので、われわれは、正面のファサードにモダンリズムのアイコンみたいなものを表層にちりばめたらどうだろうかと考えました。この左側のイメージは抽象化したものですが、右側はコラージュです。つまり建築というのは、いろいろなかたちで解釈できる。そこがおもしろいところではないかと思うのです。(次頁 図1)

青山通りから20mぐらい奥のところまでは高く建てられるのですが、後ろのほうは高さが限定される。一方、奥行きのある建物で、どうやって人を奥まで引き込んだらいいのかが一つの課題であったのですが、人間も虫と同じように明るいとところに引きつけられる傾向があるので、奥の方をスカイライトで明るくして、そこにダイナミックな空間が展開していくのがよいのではないかと考えました。敷地の条件がアイデアを示唆することは度々あり、その一つのケースだと思います。もう一つ大事なものは、やはり、どこかで前に戻れないといけない。二階に行っても前へ戻れる。直接三階のホールに行きたい人は、玄関の脇からも上がって行ける。つまり、人間の行動の中に、経路の選択があるほうが、より豊かな空間体験ができるということです。実際に虫が寄っていくように人が寄っていくのか、奥が明るい空間は魅力的なのかということは、できたものを実際に観察することでわかるわけです。建築のおもしろさは、ある仮説のもとに建てて、その仮説が正しかったのかどうかを検証し、絶えず経験することが、次の設計に対して何らかの役に立つところにあります。

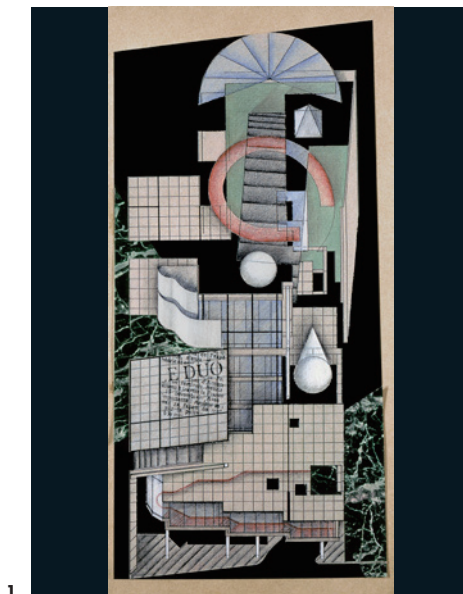
それでこのスパイラルの一番象徴的な空間がこのようにできたわけですが、「去年マリエンバードで」という、遠くに焦点があって、手前に人が一人二人いる、非常にシュルレアリスティックな映画がありました。そこでスパイラルのガーデンも、クールでシュルレアリスティックなものに作りたくなった訳です。青山通りというのは喧騒の場なのですが、一つ奥へ入ると非常に静寂な場所ができるので、シュールな場所を作るのにちょうどいいのではないかと思ったのです。建築というものは、映画をメタファーとするなど、どこかに非常に恣意的な様々な記憶が参加してくるものなのです。

## 地域とともに存在するコミュニティ・アーキテクトとして ——ヒルサイドテラス

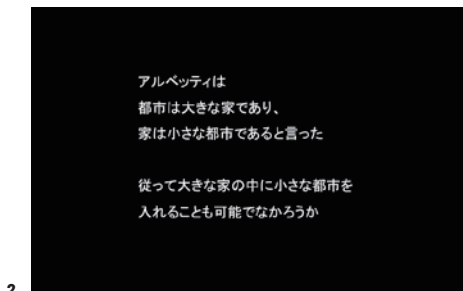
ルネサンスのイタリアの建築家アルベルティに、「都市は大きな家であり、家は小さな都市である」という有名な言葉があります。(図2) 大きな家の中に小さな都市を入れることは可能であろうが、その小さな都市というのはいったい何だろうかということが、次の問題になってきました。このヒルサイドテラスは、施主の朝倉家の方々とお会いしたのは1966年ぐらいですが、広大な土地を代官山に持っておられ、その所有する土地を少しずつ新しい姿に変えていきたいという意向で、第一期がまず作られたのです。完成したのが1969年です。注目されたのは、白さ、それから店舗と住居が一緒に入っていることです。その後次第にある小さな都市としての様相を持ったのは、小さなオープンスペースをいろいろなところに作り、そのネットワークが歩行者に対して快適で豊かなものになったことが、一つのポイントになっています。ここは昔からお屋敷町で建物の高さも当時10mに制限されており、しかし一方朝倉家のご先祖が町に敷地を提供したために、立派な道が通っていて、パブリック性があたえられています。樹木も残されています。そうしたコンピネーションがこの東京では珍しいケースだということにより、このヒルサイドテラスが、ユニークな都会性や社会性を持ってくれるようになった一つの大きな理由だと思います。

第二期になりますと、敷地奥行きが深くなってきたので、真ん中に中庭を作ってその周りを店舗にしました。こうして少しずつ雰囲気違ったオープンスペースが作られていったわけです。一気に作ってしまったら、おそらくこんなものはできなかった。いろいろな意味で経験を次へフィードバックしていくことができたのは、ラッキーだったと思います。もう一つ特徴的なのは、できるだけ隅入りで建物を作ったことにより、中を通って向こうへ出る、あるいはその逆も可能になったことです。それが空間体験を豊かにしました。

続いて70年より、文化的な拠点を作ろうというのが第三期。第五期には地下に小さいホールを作って、今でもさかんに使われています。第六期のフォーラムは、展示空間があり、手前にカフェがある。スパイラルと似たような精神です。最近、図書館も作りまして、音楽、美術、読書という、われわれの日常生活の中で大事な部分というものを、小さなかたちでもここに揃えました。一方、猿樂神社の鳥居や、朝倉家が移設した茶室がある。そして旧朝倉邸は、重要文化財として残されています。ヒルサイドテラスが、昭和から平成にかけての新しい場所を提供したとすれば、それ以前の大正時代の家や庭園、そして旧朝倉邸が残っており、ここでいろんな時代を感得できるし、都市の持っている歴史みたいなものも体験できる場所になったわけです。また、私のオフィスがヒルサイドウエストにあるのですが、建物は人間の体と同じで、時間が経てば必ずどこかおかしくなる。その過程を目撃することができるわけで、それは建築家を謙虚にするものだと思います。さらに都市と絶えず密接に毎日の行動が絡んでくる。かつての建築家というのは行動半径が広くなかったので、ある限定された



DP Architects



アルベッティは  
都市は大きな家であり、  
家は小さな都市であると言った  
  
従って大きな家の中に小さな都市を  
入れることも可能でなかろうか



Photo: Anton Grassl, ESTO

地域とかコミュニティのために作ったり直したりすることが多かった。ここで、何か役に立つことがあったら率先してやるという、コミュニティ・アーキテクトのような役割を自分が経験することができたことは、非常に幸せであったと思います。この場所が、ある社会性を東京の中で持ち続けることを願っております。

### 海外の事例から(1)

#### リパブリック・ポリテクニク、ノバルティスキャンパスとマサチューセッツ工科大学 メディアラボ

シンガポールでは、2006年にリパブリック・ポリテクニクという理工系の専門学校を、20haの土地に、一万三千人の学生のための新しいキャンパスを作りました。(図3) なぜこうした形態になったかという点、ここではプロブレム・ベースド・ラーニングというイギリスの新しい教育システムを採用しています。そのシステムによれば、まず教室というものを少なくしてしまいたい。その結果、建築のアトリエと同じような場所を、一万三千人分み持っているのです。朝、先生が来て課題を出し、夕方またその結果について議論をするというシステムで、ほとんどクラスルームというものがないキャンパスになっています。みんなで学習する場としては大きな楕円形の部分がありまして、アゴラと称しているのですが、そこで勉強をしたり食事や休憩、実験をしたりします。巨大な空間ですから、大小の中庭がありそこを通して光が入ってくるような構成になっています。いくつかの庭とコリドールをすることによって、またそれを透明な壁で繋げていき、例えばイドラというギリシャのヒルタウンに似た空間体験ができるかたちに翻訳したわけです。クラスルームはないが、あらゆるところで一人、あるいは何人かで勉強をしてよい、そうした空間をつくりました。これはブルバードと称している、縦方向の大きな道です。少し傾斜しているために、空間が少しずつずれており、彼らにとって憩いの場所も提供しています。家の中でゴキブリが隅のあるところを走り回っているのと同じく、人間もこうしたところを好むのですね。どこかで人間は動物の習性をシェアされているのだと思います。アゴラの真ん中は図書室になっているのですが、こは小声であれば議論してもよい、そういう場所が展開しています。また大きなカフェがあり、ビリヤードテーブルもあって、けっこう生徒も楽しんでいきます。この空間のおへそになるところに、ビリヤードテーブルがあるというのは、ちょっとユーモラスですが、建築には、そうしたユーモア的なものも大事だということがわかったわけです。また図書室の一隅には、インフォーマルに先生と学生がディスカッションできるところがある。このアゴラには少し高低差があるので、こういう場所をいくつでも作れました。そこで、では今日はここでディスカッションしようじゃないかと反応していく。それが建築というものと、人間の行動との間の、非常におもしろい関係が成立することができると思います。こはいくつかの中庭によって重層した空間なのですが、一人の学生が静かに自分だけの仕事をする。そういう場所も残されているわけです。ですから、一つの小さな町がこの中

に形成されている。ある程度空間が規制しているところもあるし、また解放されているところも多い。その空間は自由に彼らが使う。そうした出会いみたいなものを楽しんでいる。

次は、スイスにノバルティスという大きな製薬会社があるのですが、世界中からいろいろな建築家を呼び、建物を作っています。(図4) 全体のマスタープランはヒルバサイマーの住宅群を思い出すのですが、全部の建物のXYZが決まっています。いろいろなデパートメントがあるため、フレキシブルにしてほしいということで、五層の建物を空間的には連続した空間として捉えようと思いました。すると吹き抜けの部分が出てくるわけです。もう一つは、ダイアゴナリティというものを考えることで空間に変化を持たせてよいのではということ。コアも点対称になっており、柱もここで点対称になっています。バルコニーも対称にあらわれるわけです。この二つの空間の掟を作って展開していったわけです。ここでも、先ほどのアルベルティの「大きな家の中に小さな都市」というような考え方で、空間配置を考えています。たとえば、一人になりたいというようなところでは、バブルと称している部屋をいくつか作ってわけです。コーナーのバルコニーは、大きすぎると人はあまり出て行かない。人間というものはおもしろいもので、先のゴキブリの話ではないですが、こういうごちんまりとしたところを好むのです。少人数のための心地よいものを作るという原則が、ここでも働いています。つまり、ゆるやかで大きな空間と、比較的少人数の空間。その組み合わせについて、絶えず問題設定をして実際に結果を見てよし悪しの判断をしているのです。

もう一つ、「大きな家の中の小さな都市」ということで、今年の三月にできた、MIT(マサチューセッツ工科大学)のメディアラボをご紹介します。(図5) 1980年にできたメディアラボのエクステンションというかたちで、この建物を作ったのですが、いろんなスタイルの建物の中で、一つのアイデンティティをどういう風にして出すか、どういう風に内部の持っているアクティビティの機能を、外部に表現していったらよいかテーマでもあったわけです。

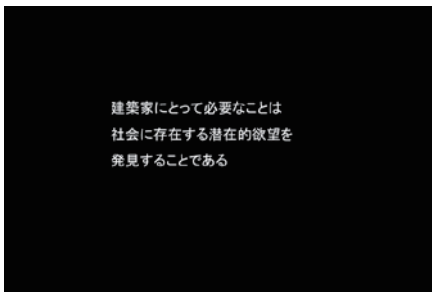
こは7つのラボに分かれていまして、一つのラボは、コの字形に先生やシニア・リサーチャーの個室がメザンレベルにあり、その間が大きな二層吹き抜けの空間で、いろんな研究ができるようになってきています。それが二層ごとに東西と南北方向にスタガー(交互に配置)していています。彼らの要望は、できるだけ視覚的に透明性が高い、ちょうど一つの家みたいなものを作ってほしいということでしたが、垂直性、水平性、それからダイアゴナリティというものをうまくここに演出することができました。真ん中にアトリウムがあって、大きな階段がそれらをコネクティングしているわけです。

一番上は階段教室と、エキシビション・スペース、パーティなどができる場所に分かれており、MITのキャンパスとボストンが一望できる場所も作りました。ボストンで、普通の建物は50%しか透明な表層を作ってはいけないという制約があります。ところがメディアラボはぜひ透明な建物を作りたいということなので、このスクリーンを前において、問題を部



6

Photo: 北嶋 徳治 Toshitaru Kitajima



7



Photo: Jeff Tataro

8



分的に解決しようとしていました。これが真ん中の吹き抜け空間で、透明なエレベーターがあるのですが、比較的階段も使われている。普通のものよりは寸法を少しゆるやかにして、上がりやすくしています。聞くところによるとエレベーターを使わないで、この階段でいろいろなところを見ながら、上がったり降りていけるというのが研究者にとっても一つの魅力のようです。ここには240のスポンサーがついているのですが、その人たちが自分がスポンサーをしていない様々な研究も自由に見られるためです。MITは軍事産業にも関わっているため、古いところでは開口部がなく、何をやっているかわからないのに対し、ここは非常にオープンな研究機関でもあるわけです。これは私が好きなディテールなのですが、大きな透明の敷居を作っています。こうしたものは、ただスケールがよければいいとか、ガラスであればいいということではなくて、もう少しディテールを考え、アセンブリートし、最終的にこうした空間体ができるのです。

### 「一人のためのパブリックスペース」

次にお話しするのは、かねがね私が主張している一人のためのパブリックスペースです。パブリックスペースというのは大きな人がざわついているところだけがパブリックスペースではなくて、一人のためにとって気持ちのよいところも都市の中では重要なテーマではないかと思っています。イスファハンというイランの町にあるチャドバクという100mの幅の道では、真ん中にちょっと高く、人のための歩道があります。両側が車道になっていて、向こう側が普通の歩道と商店街や住宅になっていますが、ここはそうした喧騒から隔絶された歩行者だけのためのすばらしいブルバードで、夕方になると、市民たちが三々五々出てきて楽しんでいる。人間のディグニティ(威厳)を尊重したブルバードとして、よい例だと思います。またアテネには、丘をすり鉢状に切って、この正面にT字の道があるのですが、これも人がいてもいなくてもすばらしいですね。スパイラルでも、エスプラナードのところにくつかイスがおいてあります。(図6)ぼんやりと青山通りを見たり、それから本を読んだり、そういうことのできる場所。東京のような都会では、こういう場所が少ないのです。僕が子供のころのホテルのロビーには、ただで何時間いてもいいような場所があったのですが、今は利益をあげるための空間になってしまっている。そうした中、このスパイラルのエスプラナードは重要な意味を持っていると思います。

広島県三原市の公園の中にあった多目的ホールが小さくなったので新しく作ったのですが、ここでわれわれが重要視したのはホワイエなのです。オーデトリウムと一体の高さを持ったホワイエというものは非常に多いのですが、この周辺には庭があって、子供の遊び場もあって、野球場もあって、小さな子供のための施設がたくさんあるということで、ホワイエをむしろバヴィリオン風に考えたほうがよいのではと思いました。オーデトリウム設備もあるのですが、10万くらいの都市ですから、1,000人規模のイベントというのはそうあるわけではない。ならばホワイエは、イベントがないときには市民に使いや

すい空間にするほうがよいのではという発想になったのです。われわれの考えていた、静かなインフォーマルなホワイエというものは周縁公園全体の中に溶け込んで、抵抗なしにその前を子供たちが通っていく。浮世絵を見るといつも思うのですが、日本人の感覚として風景があって一人二人が点描としてある場合が多いということに、どこか考えさせられることがあります。中庭を作ることによって、イベントの時はここは使えるし、天気よければ中庭も空間の一部として使えるわけですが、市民が来て何とはなしに話をする、そういう場所を設けることができたと思います。おもしろいのは、安くこの場所を貸してコンサートをすることもあるし、ホワイエを使った披露宴があるという話です。ビルサイドウエストも、前が小さな庭になっていて、レストランが下にあるので、新郎新婦がよくそこで写真を撮っています。そういう風に社会の中で、予期しない形で、ユーザーのほうが逆にイメージネーションを使っていろんなことをやってくれる。それはこういう空間に、ある社会性が付与されたと言えるのではないかと思います。社会に存在する潜在的な欲望、表には出てこないが何を求めているのかを掘り出して空間化することも、建築家にとって非常に重要なことです。(図6)

### 建築家による葬儀場——風の丘葬祭場

これは、大分県中津市にある風の丘葬祭場です。(図7)葬祭場の多くは二極化しており、一方はあまりお金がないのでシャビーなもの。一方は立派な葬祭場がありまるでエアターミナルのロビーみたいなもの。そういう二極分解の中で、最後に親しい人がお別れをする場所というのはそのどちらでもないのではないかと。一人の建築家が葬祭場とはこうではないですかというかたちを提案して、それを空間化していった一つのケースだと思います。棺が車で到着すると、前庭を歩いて奥まで入って行きます。エントランスホールがあり、上から光が入って、更に次の空間へ行き、そこで最初のお別れをします。真ん中の庭は絶対空間みたいなもので、人は入らない。待合の場所は、外にサンクン・ガーデンがあって、前の公園と分離されています。最後はエンシュライメントルームがあり、遺体のお骨と灰を、親しい人たちが自分の壺にシェアして持って帰るところですね。この葬祭場で葬られることを、市民が非常に誇りに思ってくれまして、感謝の言葉をいただきました。ここは市外の人には登録制ですが、昔私の事務所に行った女性の方が、この前登録してきたそうで、ちょっと早すぎるのではないですかと言ったのですが、それだけ親しまれています。これも潜在的に社会が葬祭場に対して漠然と持っている欲望を発見するという意味で、大事な作品だったといえます。

### 海外の事例から(2)

#### ペンシルベニア大学とフローティング・バヴィリオン

アメリカのキャンパスは、歴史はせいぜい200年、300年の歴史しかありませんが、建物はギリシャから始まり、ゴシック、ルネサンス、近代から現代まで、ぎっしり歴史的なスタイルをもったものが存在しているわけです。その中で、どのように自分が作るものにアイデンティティを与えるかということに、

9



10

October 15, 2010

Dear mr. Maki, It is a long time we talked to each other. We are proud to tell you that finally the cityboard decided to transport your pavillion to the harbour of Groningen, where it will be fully restored and will be used for cultural and commercial manifestations. I hope that you are as satisfied as we are. With friendly greetings Niek

12



11



このプロジェクトに対する自分なりの課題を決定しました。これはペンシルベニア大学のアーネンバーグパブリックポリシーセンターという建物で、昨年できました。(図8)60年代のモダニズムと、それから木とレンガを使ったピッチドルーフの建物に挟まれていて、透明なガラスの中に木のパネルを入れることで、一つのアイデンティティを出すと同時に、暖かさのある建物を提案しています。ちょうどできた翌日に建物のエントランスに立っていたら、まったく知らない人が、「良い建築ですね」と言ってくれたのですが、このキャンパスの人と建築の間に、そうしたあるダイアログといえるものが成立したとことはよかったです。先生の部屋は、みんなここに入りたがり、落ち着いて仕事のできる環境がほしいという潜在的な欲望みたいなものに対して、一つの答えを出せたと思います。1996年にできた、オランダの北にあるフローニンゲンのフローティング・バヴィリオン。(図9)冬は寒く、夏場が彼らにとつての楽しみ時ということで、夏のフェスティバルのための「浮かぶ劇場」の設計を依頼され作ったものです。コンクリートの箱の上に、ダブルスパイラルのルーフを持ったもので、タグボートで押されて運河の上を行くわけです。夕方になると、岸辺に人々が集まってきて、この上でいろいろなパフォーマンスがあります。船の船尾にちょっとした階段があって、下にドレッシングルームや倉庫があるという、非常に簡単なものです。おもしろいのは、こういう郊外に行くと、白鳥みたいに見える。曇りの日には、空の雲のようにも見えてくる。そのように見えてくるということは、建築と風景との間にどのような関係があるかということを考える非常にいいテーマでもあるわけですね。アイコンというものが常に存在し、環境というものは必要としないのか、与えられた環境の中で建築はできていくのか、そういうものをアイコンは超越しているのか、いろんなことを考えさせる機会としてよかったです。できて何年かは使われていたのですが、急いで作ったので、ルーフが痛んでしまって、だんだん使われなくなっていた。しかしオランダでは、公共のものは建築家がノーと言えば、壊すことができない。それで、残しておいたほうがいだろうと、数年前知らない市民の一人がアドヴァイスしてくれました。ところが、2010年10月15日に、市から、議会がこのバヴィリオンをもう一度完全にリストアして、今後様々なイベントに使うとしているので、あなたも満足でしょうという手紙が来たのです。(図10)いつもそう思うのですが、人間、人生といいますが、建築にも一つの歴史が、人生じゃなくて建生っていうのですか、そういうものがあって、自分にとって非常にドラマティックな話であったわけです。一つ一つの建築に出会いがあると先ほど申したのですが、同時に、今申したような歴史も必ずそこについて廻ります。

## 最新のプロジェクト

### ワールド・トレード・センター タワー4

今、施行中のニューヨークのワールド・トレード・センターのお話をして、終わりにしたいと思います。(図10、図11)タワーNo.1は、フリーダム・タワーと当時は称していまし

た。SOM(スキッドモア・オーイングス&メリル)が手掛け、それからNo.2をノーマン・フォスター、No.3をリチャード・ロジャース、そしてNo.4をわれわれというかたちで、進めることになりました。(図12)メモリアル・パークを囲んだ4つのタワーは、リーマン・ショックで2と3はどうぶん建たない、5つめはないとなりました。われわれのタワー4と1だけが今工事中です。メモリアル・パークは、来年の11月、9.11の十周年に、とにかく部分的でもいいから表層だけは完成しようということで、日夜工事を進めています。二つのサンクンガーデンは、かつてのトレード・センターの跡。そこをサンクン・コートにして、その下にもいろいろ施設があるので。われわれのタワーは、リベスキンドに対応した、全体の螺旋状の流れの最後のタワーでもあるのですが、一階がメモリアル・パークに面して、各々4つの道に囲まれています。中に入ると、大きなロビーがあり、西野康造さんのハンギング・スカルプチャーが来るはず。正面が真っ黒な壁で、これが日に当たるとミラーになって、この前のメモリアル・パークを映し出すようになっています。そして3つの廊下があり、エレベーター・バンクに行くのですが、雲、水、森を象徴しています。今のところこの建物は2012年に完成しますが、オープニングは2013年になります。

このグラウンド・ゼロ全体を見ると、やはりそこに、ある人間の人生と同じように、変転があるわけですね。あるときは何か華やかで、あるとき少しダメになったり、また息を吹き返したり、そういうことが、この建築というものの自身にあるわけで、われわれ建築家というものは、それとずっと付き合っていくわけです。その中で、われわれは自分が実際やったものだけではなく、他人のものからも、建築というものはこういうものだというのを、絶えず教わっていく。それがやはりあって、建築の社会性とは何かということについて、さらに考えを深くするきっかけができると思うのです。

●